

こきゅう



01. 建築動機

日本には多くの資料や文化があるが、その価値は十分に生かされていないと感じる。特に自給率の低さは大きな課題であり、建築を通してその解決に取り組みたいと考えた。日本は木や土、竹など豊かな自然資源を持ちながらも、建築資材の多くを海外に頼っている。資源の海外依存は環境負荷を高めているだけでなく、日本の素材や技術が使われなくなる一因にもなっている。

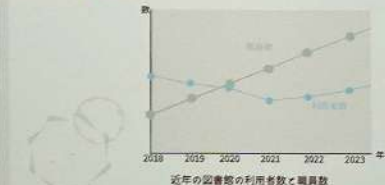


また近年、昔ながらの日本らしさは薄れているためそれを大切にしつつ、現代らしさも取り入れて未来へ繋げることが重要である。これらを担う私たちは、日本の課題解決と文化継承の実現を目指した建築を考えるべきではないだろうか。

日本の課題 解決に向けた取り組み × 日本の文化 文化継承に向けた取り組み → 次世代の建築

04. 建築提案

私たちは漆喰を応用するために人が集まる場所を建築を創り出す必要があると考え、コンサートホールを建てることにした。しかし、コンサートホールのみでは来場者数が安定しない。そこで、ここ数年で利用者数・職員数が増え、数を増やしている図書館に注目した。図書館は定期的に本を借り、返すの来場者がいる上に勉強の場や、友人と集まる場としての憩いの場となりうる。



そんな地域の人が集い、コンサートの観客にぎわう憩いの場を提案する。

02. コンセプト

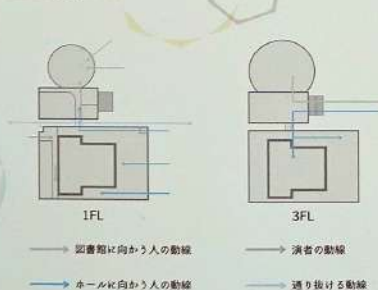
この建築は「こきゅう」のように生きる。漆喰の壁は、空気中の二酸化炭素を取り込みながら硬化する。それはまるで、建物自体がこきゅうし、生きているかのようだ。漆喰という素材には、湿度を調整し、空気を清め、空間をやわらかく包み込む力がある。また、古くから日本の建築を支えてきたこの素材を使うことで、伝統技術を受け継ぎ、文化を未来へとつなぐことを目指した。

外には地域の人々が協力して育てるグリーンカーテンを設け、植物が光を受けて酸素を生み出す。長い年月をかけて建物と共に成長するその姿は、人と自然の共生を象徴している。

図書館では知識が、コンサートホールでは音が響き、人々が集い、語り、笑う。この建物を通して人々が文化に触れ合うことで、建築全体が一つの生命のようにこきゅうをはためる。

「こきゅう」という名には、そんな想いを込めた。止まることのないこきゅうのように、文化を受け継ぎ、自然と共に生き続け、人と人をつなげる存在になることを願っている。

人の動線



03. 漆喰について

先ほど述べたように、近代の問題として資源の自給率の低さが挙げられる。そこで私たちは「漆喰」に着目した。漆喰の原料である石灰石は日本で唯一、自給率100%の天然鉱物資源である。



また、漆喰は文化的にも日本に根づいており、漆喰を使うことで伝統技術を次世代に繋ぎ、文化復興に貢献することができる。

漆喰文化 知る・愛用 広める → 次世代に繋げる

図書館とコンサートホールの利用者を完全に分断するのではなく、人々の動線が絡み合う場所を作ることで思いがけない出会いや交流が生まれるように設計した。

とくに連絡通路は、コンサートホール、カフェ、大階段など主要な動線を集め、多くの人が集まりやすいよう設計した。グリーンカーテンで覆われており、地域の人々は自ら植えた植物の成長を見届けることができる。大階段は12mの幅広となっており、ここに座り音楽することもできる。

また、来客者側の動線と演奏者・職員の動線が被らないように計画した。コンサートホールのエントランスから入ってすぐには広いロビーがある。ここには机と椅子がたくさん設けられており、コンサートに来た人たちはもちろん、カフェを利用しに来た人や勉強しに来た人が利用できるスペースとなっている。

00. 鳥瞰図

屋上ガーデンテラス

木々が生い茂っている屋上テラス。建物と自然が共存しているような場所。

連絡通路

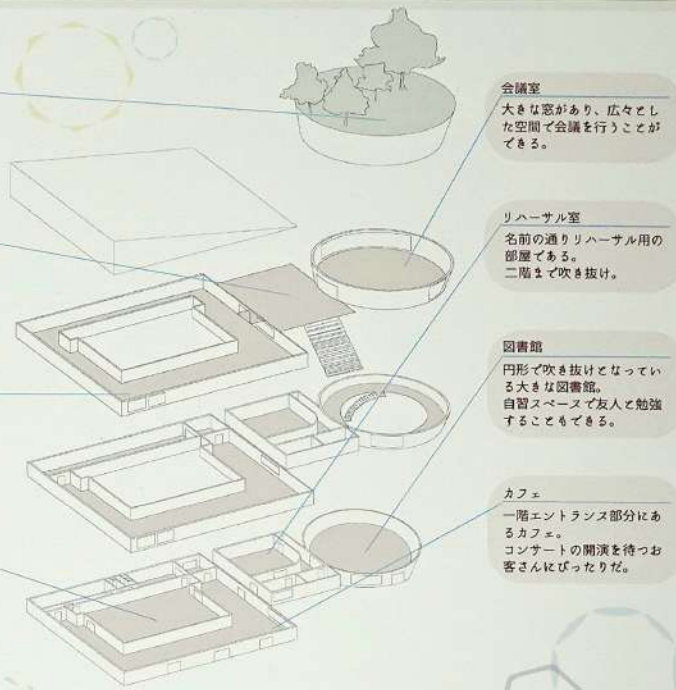
図書館とホールを繋ぐ通路。多くの人が集う憩いの場である。緑のカーテンを設置しているため、夏でも涼し気。

3階ロビー

連絡通路から入ることのできるホール入口。ここでホールの受付を行う。観客はベンチに座って待つことができる。

コンサートホール

一階から四階まで吹き抜けの高さ約20mのコンサートホール。漆喰により柔らかい音色を届ける。



会議室

大きな窓があり、広々とした空間で会議を行うことができる。

リハーサル室

名前の通りリハーサル用の部屋である。二階まで吹き抜け。

図書館

円形で吹き抜けとなっている大きな図書館。自習スペースで友人と勉強することもできる。

カフェ

一階エントランス部分にあるカフェ。コンサートの開演を待つお客さんにぴったりだ。

漆喰の利点

01 安全性

天然素材であるため、シックハウス症候群の原因となる有害物質を含まない。子どもが触れたり舐めたりしても問題ない。

02 抗菌効果

石灰由来の強アルカリ性が菌やカビの繁殖を抑える。条件次第でウイルス不活化にも一定の効果があるとされる。

03 耐久性

施工後も炭酸化により硬化し続け、強度が増す特性を持つ。適切に施工されれば長寿命だが、ひび割れには注意が必要。

04 廃棄しやすい

廃棄時には石灰岩に戻り、焼却しても有害ガスを出さない。環境負荷が低く、リサイクル性が高い。

05 意匠性

塗り方によって多様な表情を出せ、顔料を混ぜてカラーバリエーションも作れる。現代風にも和風にも対応可能。

06 湿度を調整

細かな孔が湿気を吸収・放出し、快適な湿度に近づける。急激な湿度変化を和らげる効果がある。

07 耐火性

石灰ベースの不燃材なので燃え広がらない。ビニルクロスと違い炎が広がりにくい点は実験でも確認されている。

08 CO₂を吸収

施工後に空気中のCO₂を取り込みながら炭酸カルシウムに変化し硬化する。時間が経つほど強度が上がり、環境的にもよい。

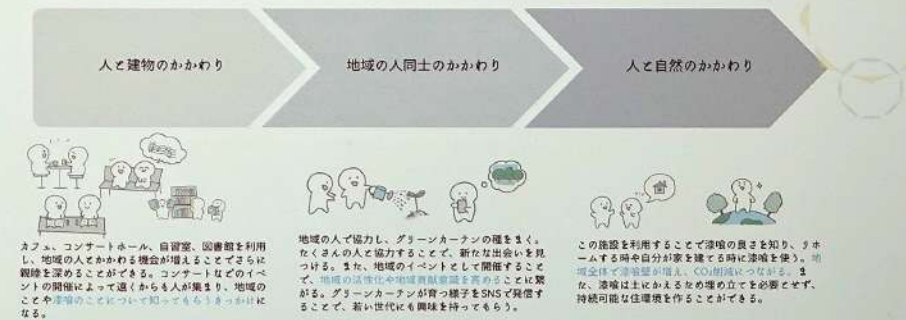
09 防音性

多孔質構造が音を拡散・吸収する効果を持つ。完全防音ではないが、生活レベルでの遮音・吸音には有効。

10 消臭効果

多孔質構造であるため、生活臭やペット臭を吸収しやすい。特定の悪臭成分を分解・抑制する働きも期待できる。

05. 未来予想図





雨音のライブラリー

○コンセプト

日本には四季があり、豊かな自然環境が溢れています。
 「わびさび」という言葉があるように、日本人は昔からそのような「環境」に敏感で、独特な美意識をもっていたと思います。
 一方いまの私たちは、イヤホンで音楽を聴きながら、スマートフォンをいじることが習慣となっていました。
 「日本の資源や文化を活かす」とは、本来敏感であった五感を取り戻すことと考えました。

日常の中で五感を振り巡らせ、「環境」を感じられる「雨音のライブラリー」を提案します。
 ここでは普段気にならない雨音に耳を澄ませてください。屋根の厚さや素材をかえる事で雨音に変化をつけ、メロディのような音が聴こえるようにしました。
 雨音以外にも、風鈴が鳴る音、かざぐるまが回る音、動物の鳴き声に耳を澄ませたり、雨の動きや水面に落ちる雨粒を眺める場所もつくりました。
 雨が降ってきたときは、雨宿りをかねて、このライブラリーでぜひ五感で「環境」を感じてください。



○音のしくみ

私はバンドでドラムを演奏しています。色々なモノをスティックで叩く事があるのですが、素材の硬さや厚みで音色が変わると感じていました。
 そこで屋根の厚みや素材を変えることで、色々な音階の雨音を発生させることができるのではないかと考えました。



畳でつながる 本と人の環

■コンセプト

日本の住まいの基本であった畳の和室は、内と外を豊かにつなぎ、冠婚葬祭から日々の暮らし（食べる・憩う・寝る・もてなす）まで、多様な時間と出来事を包み込み柔軟な場を育んできた。畳空間が持つそれらの価値を、これからの住まいに引継ぎ、北天下茶屋の人々の暮らしと共にある開かれた住まいを提案する。



「街の環」を中心とした、「セミパブリックゾーン」は、日中、街に開き、夕暮れ以降は、家族の生活の場に変わる。

いらっしやーい、お菓子できたらー

電車が来るまで、時間があるし、あそびまわろう

トイボックス

お菓子売りに来たよー

おもしろいです。お菓子もたくさんありますよー

なんだが、楽しそうなのであそびまわろう

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

お菓子の販売場

配置図 1階平面図

■面積表

	(LDK棟)	(寝室棟)	(計)
敷地面積	53.0	67.8	120.8 m ²
建築面積	40.0	44.0	84.0 m ²
1階床面積	38.0	44.0	82.0 m ²
2階床面積	40.0	38.0	78.0 m ²
延床面積	78.0	82.0	160.0 m ²

敷地A (LDK棟)

敷地B (寝室棟)



■近隣説明図



近世（江戸時代以前）
豊臣秀吉が堺への往来に立ち寄った茶屋があり、「天下の茶屋」とされ、地名の由来になる。街道沿いの休憩所としても機能していた。天下茶やせさい（浪花百景）CCO



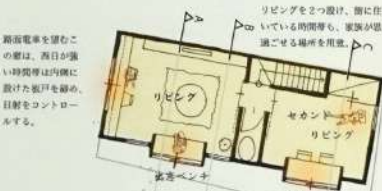
近代（明治～昭和中期①）
明治期に入ると、大阪中心部に隣接するこのエリアでは、ちん電という路面電車（上図）の他、地下鉄、南海電鉄の整備が進み、商店街がこの近辺一体に形成された。



近代（明治～昭和中期②）
「北天下茶屋商店街」は地域の生活の中心となり、人通りも多く賑わっていた。現在は、昭和レトロな店舗を残す一方、シャッター商店街が増加している。



現代（昭和後期～令和）
昭和レトロな喫茶店が残り、古民家を改修した店舗性のあるカフェや店舗なども周りに点在するが、多くの店舗が空き家となり、落書きもみられ、人々の町への愛着が薄れつつある。



2階平面図



A-A' 断面図



B-B' 断面図



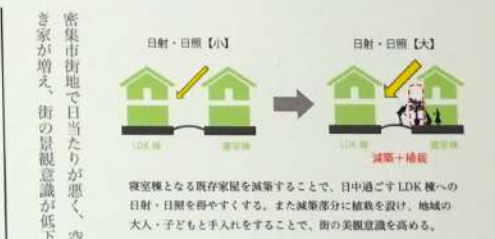
C-C' 断面図



立面図



■北天下茶屋エリアの課題に対する解決策の提案



OKOMEミュージアム



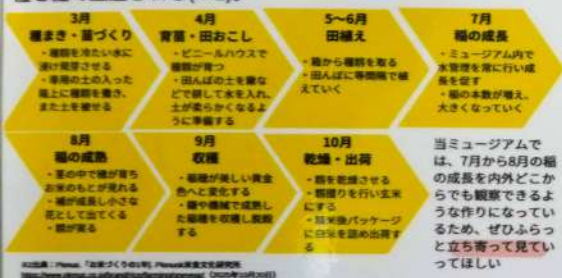
そこで私が提案するのは、古き良き日本の伝統「稲作」をもっと近くに感じられるミュージアム。



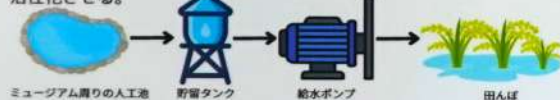
しかし、日本での米農業の歴史は長く、縄文時代後期から今まで続く由緒ある日本の伝統だ。また「お米の国」としても名高く、あきたこまち（秋田県）コシヒカリ（新潟県）など全国各地で様々な種類のお米が生産されている。

#1出典：全日本，<https://www.sanshi.co.jp/news/release/7072719767861%2B7067076E576D%A7.pdf>
（2025年10月20日アクセス）。

まず、お米づくりは1年という長い年月をかけ、様々な工程を経て生産される(※2)。



＜水管理＞
ミュージアム周りで作成した人工池から、田んぼへ水が回るシステムを下
の様に準備し、一年中水質管理を行う。また、ヒメガマや水生植物で稲を
活性化させる。



＜日当たりの管理＞
日当たりを良くするため、二階の田んぼを覗ける円部分を**トップライト**にし、適切な日当たり量を確保できる様にした。また、ミュージアム全面ガラス張りすることでより多くの日照時間を確保できると考えた。

また、稲作シーズン外でも**公共施設**として、居心地が良くかつ日本の伝統を存分に感じられる場作りもコンセプトに入っている。例えば、ステージでは階段上の座席から日本舞踊とその奥の田んぼを同時に見れるように工夫した。また、歴史館や図書館コーナー、二階の屋上スペースを設けることで、OKOMEミュージアムを公共施設としても使え、稲作にも一年中触れることができるような工夫もなされており、成長を見守ることができる。

ミュージアム制作計画地は東京都世田谷区成城だ。



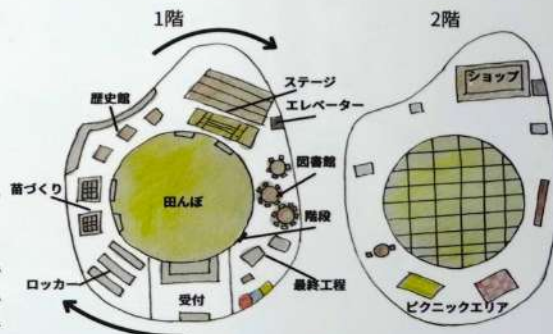
高級住宅街が連なり、人の出入りも多いこの場所は、武蔵野台地南端の高台にある。火山灰（関東ローム層）が厚く地盤が非常に安定しているため、田んぼ作成のための工事や人工池作りでも地盤がたえられと考えた。また、自然が豊かであることも稲作を行う上で欠かせない存在となっている。

こちらのミュージアムは二階建てである。
全体面積：1200㎡
田んぼエリア：254㎡

建物の内装は白色で、独特な形をしている。
この形と色は、日本米を表現しており、上空から見た際にすぐにOKOMEミュージアムだとわかるような工夫となっている。

また、田んぼエリアとミュージアムは空間が分かれているが、全面ガラス張りにしたことで、内外から手軽にお米の成長を見ることができる仕組みとなっている。

二階部分の屋上もトップライトで覆うことで全方向から観察することができる。



ミュージアム一階部分は時計回り（矢印方向）に回ることでお米の一年間の成長を体験できるようになっている。二階の屋上スペースはショップや自由に駆け回れるエリアになっている。

1.受付 受付を済ませミュージアムに入場！

2.ロッカー ロッカーにて着替えと貸し出し

3.苗づくり ビニールハウス

4.田おこし 鎌を用いた田おこしに挑戦！

5.田植え

6.収穫

7.脱穀

8.図書館 図書館エリアに設置してある各机には、稲作や米についての本棚があり、本や資料を読むことができます。

9.乾燥 乾燥機を使用して実際に脱穀の様子を観察する。

10.精米 乾燥機を用いて稲を乾燥させる。その後机上ですり鉢と軟式野球ボールで撈揚り(※4)を行い、精米機で精米し、オリジナルパッケージに詰める。

11.完成！

12.階段 田んぼ周りに連なる階段で二階まで上がる。

13.二階屋上スペース 上から田んぼが見下ろせる！自由に年中過ごせます

14.グラスショップ 美味しいお米料理講座も開催！

15.展示

ここでお米の歴史を年中発信する。

出典：主観性研究所（2021）、「音楽を聴いて書く編」，主観性研究所。https://
atl.com/sainei/120002025年10月21日アクセス

KIOME BLDG

- I. SPIRAL
→すべての田んぼに目が当たる。
- II. BLDG
→縦に積むことで横幅をあまり使わず、
大きな土地を必要としない。
→都会に適している。
- III. CITY
→設備が整っている。
→多くの人や外国人が目にする。
- IV. SEASON
→オンシーズン(春・夏・秋)はコメ作りをし、
オフシーズン(冬)はおにぎり屋を設ける。
おにぎり屋を設けることでコメのPRとなり、
コメの魅力に気づききっかけとなる。

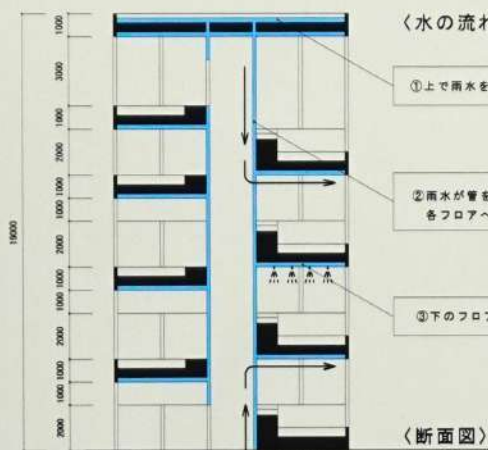
新しいコメ作りのはじまり



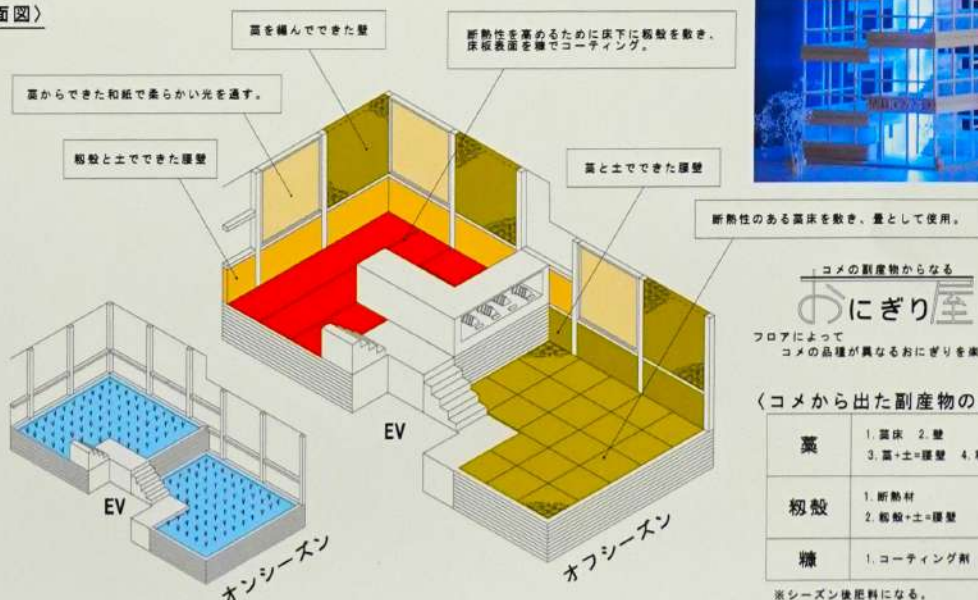
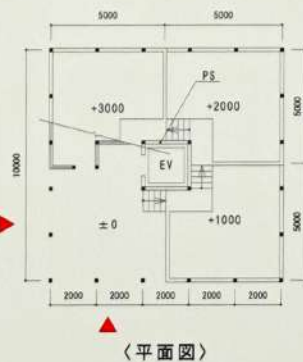
建築模型とドローン撮影「ようこそ」「いらっしゃい」



日本の宝“コメ”。そのコメが不足している昨今、問題解決にひとりの高校生が立ち上がった。まず問題点として挙げたのが、コメ作りのイメージと場所である。問題解決のひとつとして都会にもコメ作りの場を広げた。そこで多くの人々がコメの新たな魅力を発見する。日本の伝統文化を世界へ発信する木造建築、その名も“コメビル”。



※余分な雨水は地下へ貯水し、乾季に放水として利用する。



コメの副産物からなる
おにぎり屋
フロアによって
コメの品種が異なるおにぎりを楽しむ

〈コメから出た副産物の活用〉

藁	1. 藁床 2. 壁 3. 藁+土=断熱材 4. 和紙
籾殻	1. 断熱材 2. 断熱材+土=断熱材
糠	1. コーティング剤

※シーズン後肥料になる。

地域及び日本の特徴のある音を残す試み
An Attempt to Preserve Unique Sounds Characteristic of Regions and Japan.

1. 背景・目的

都市の中には、風の音や虫の音といった自然の音、電車の走行音や車のクラクションの音といった交通の音など様々な音が溢れている。近年都市化が進み、自然の音は減少し、交通の音など人工的につくられた音が増加している。これら人工の音が増加することによって街の中の音は単調となり、その音に慣れてしまった人々は日常の音を騒音として捉えてしまっている。

本校は 2026 年度に別のキャンパスに移転し、跡地は再開発される。本校は都心に位置しているにも関わらず、自然が多く、耳を澄ませると多くの自然音が聴こえる。音には様々な力があるが、その中の記憶を呼び起こす力を利用し、音を残すことによって現在の記憶を後世につないでいきたいと考える。

そこで本研究では本校の敷地を対象とし、街の中の音を明らかにすることによって、人々が音を聴けるようにするための取り組みや空間づくりを提案する。

2. 研究対象

本研究は、本校（東京都港区芝浦 3-3-6）の敷地を対象とする。

3. 文献調査 「どういふことを知ろうと思ったか」

3.1 文献調査の目的

サウンドスケープが生まれた背景、および、なぜ現代の人は音が聴こえなくなってしまったのかについて調査する。

3.2 成果

コンサートホールの発明¹⁾により、コンサートホールの外と内で壁ができてしまい、ホールの中の音は高尚な音、外の音は無視されるようになってしまった。外の音は騒音として排除されるようになった。騒音とは、人間が注意深く聴かなくなった音のことであるという。注意深く聴かなくなった、つまりノイズとして捉えてしまっている。このことから積極的に聴くという行為をしなければノイズという状況は変わらないままである。なぜ、聴くという行為が大切なのだろうか。ホールの外にはホールの外でしかできないことがある。例えば、サウンドスケープを提唱したマリー・シェーファーがつくった「星の王女」はホールではなく、現実の湖へと音楽活動の場を移行した結果、従来の音楽にはなかった音響的な特性を確保している。このようにホールの外にはそこでしか感じられない特有のものがあるとわかる。また、その土地で耳を澄ますということはその土地を理解するということでもある。そして音には記憶を呼び起こす力もある²⁾。そのため、今回は過去、現在、未来の3つの視点から、音、環境をとらえていく。

3.3 考察 「なぜ都市に住む現代人は聴こえる音が騒音になってしまっているのか」

コンサートホールの発明により、人々が外の音を聴かなくなってしまった。また、コンサートホールの発明だけでなく、いろいろな音楽が生まれたことで、その音楽は音として認識しているが、街の音はそれ以外の音として区別してしまっている。

騒音とは人間が注意深く聴かなくなった音であるという点から、そもそも現代人は注意深く聴かなくても聴こえる音以外聴こえていないということである。また、都市の音が騒音になってしまった理由として交通音、機械音が多くこれらの音は変化があまりないため、聴いていても何も感じないから、通っている人は毎日その場所を通っているため、その音に慣れてしまっているから、ということが考えられる。つまり、現代人は街に溢れている音を騒音としている、または認識していないと考えられる。

3.4 現代人が町の音を聴けるようにするために必要なこと

考察 1 より、街の音を騒音としないために、注意深く聴いていない音を注意深く聴けるようにする。

注意深く聴くという行為は、時間、余裕がないと難しい。これは、1回のサウンドスケープリサーチを行うことによって時間がかかることから裏付けられている。

現代人が音を聴くことができるようにするためには、注意深く聴かなくても聴けるようにすることである。加えて、騒音として捉えてしまっている人へ向け、音を心地よくすることによって音を聴けるようになることが予想されることから、音を聴けるようにする仕掛けが街の中に必要であると考えられる。

古くから日本には音を聴くという仕掛けが多くある。例えば、ししおどし、風鈴や水琴窟などである。そこで、これらの音を現代の音と融合させれば、音を注意深く聴くということができるようになるのではないだろうか。

4. 実例調査

街の音を聴く仕掛けにはどんなものがあるか、および、日本古来の音の聴き方を調査することを目的とする。

4.1 鳥越けい子さんの作品²⁾

4.1.1 西鶴屋音響計画

橋そのもの、および、周囲の音環境の振動エネルギーを拾って微小な音が発音する仕組みの装置を設置したもの(図1)。小さな音に耳を傾けることで日々ここを通行する人々の閉鎖的な耳を環境に開き、さらに劣悪な都市の音環境、空間全体への意識の高揚を目指したもの。

4.1.2 横浜博覧会会場音響デザイン

横浜港の波の音をリアルタイムで聴くことのできる「サウンドブイ」の開発、人の動きに反応して鳴る「大地パイプオルガン」の設計と運営、「宇宙虫」の声が聴こえてくる「音の野原」の整備など(図2)。

4.1.3 音の種

樹木の種子の形をそのまま巨大化し、野外彫刻の中に音を入れた音響彫刻。彫刻に触れて音を聴くことができる(図3)。

4.1.2 耳のオアシス

音を聴こうという姿勢によってその他の五感、新たな感覚が呼び覚まされるようにしたもの。耳の形の遊具によって、鳥の声、風の音、周囲の竹林の響きなどを聴くことができる(図4)。



図1 西鶴屋音響計画²⁾



図2 横浜博覧会会場音響デザイン²⁾



図3 音の種²⁾



図4 耳のオアシス²⁾

4.2 音をめぐる新たなアート¹⁾

4.2.1 ウィンドアンテナ

直径2.4mの傘に張られた60本のステンレス弦が風で共鳴して鳴るもの。音は風の強さや方向によって様々に変化する(図5)。

4.2.2 ウェーブ・オルガン

サンフランシスコの海岸に常設された土木的インスタレーション。海中まで伸びた何本かの伝声管のようなパイプによって、水中の音やパイプを打つ波の音を聴くことができる。パイプの太さや長さによって同じ波の音も様々に聴こえ、潮の満ち引きによって音が変化する(図6)。

4.2.3 タイムズ・スクエア

地下鉄の排気口の中にいくつかの音響発生ボックスを配置。都市の中からときおり聴こえてくる「人

工的な音」をきっかけとして、ニューヨークの生きた都市の実態に人々の意識を導いていこうというもの(図7)。



図5 ウィンドアンテナ¹⁾



図6 ウェーブ・オルガン¹⁾



図7 タイムズ・スクエア¹⁾

4.3 日本古来の音との融合：水琴窟の東屋²⁾

紙管の東屋によって視覚的にはできるだけ景観を遮断する一方、聴覚的には開かれた空間となっている。訪れた人が水琴窟のかすかな水滴音に耳を傾けることによって、外界の車の騒音や会場内の雑踏など自分の周囲の音環境にも耳を開き、都市の音環境に対する意識を高めようとしたもの(図8)。



図8 水琴窟の東屋²⁾

4.4 日本古来の音の聴き方

ししおどし、水琴窟、風鈴

4.5 滝廉太郎記念館¹⁾²⁾

滝廉太郎記念館整備事業において、記念館の庭園設備・設計を行ったもの。実際に滝廉太郎が少年時代を過ごした土地、その敷地で行われている。「訪れる人が廉太郎が当時聞いていたであろうこの家や庭の音風景を少しでも追体験できるような音環境を設計する」ということを基本コンセプトにしている。廉太郎にゆかりのある人々へのヒアリング調査や町のフィードバック調査、廉太郎に関する文献調査等による成果をもとに、廉太郎が聞いていたであろうと思われる庭の響きを、日本の伝統的な作庭技法によって再現し、旧宅や竹田の街での廉太郎の音風景体験を小冊子と「竹田・廉太郎マップ」にまとめられている。「竹田・廉太郎マップ」は少年時代の廉太郎が様々な音と関係を取り結んだまちをたどりながら、まち歩きをするための地図として作成されたもの。「音」というメディアを通じて、廉太郎記念館を敷地外へと広範囲なまち全体へとつなげていくことを目指した展開方法。この計画を記念館の敷地という閉ざされた空間のみを対象としたプロジェクトにとどめず、「竹田のまちづくり」へとつなげていくことを目指したもの。

4.6 読み取れること

4.1.1より、街のある音は心地よい音だけではないということを感じることができる。小さな音に耳を傾ける。つまり、いつも聴き逃してしまっている音に耳を傾けることができる。4.1.3より、触ることで音を感じられるということは新たな感覚であり、ただ耳を澄ますということより多くの人が興味をもてるかもしれない。4.3より、かすかな音に耳を傾けることによって他の音も聴くことができる。4.5より音を通して過去を感じるということができるとわかる。

4.7 実例調査より町の中の音を聴く仕掛けにおいて必要なもの

普段耳を傾けることのないものや新たな刺激を取り入れることによって、新たな刺激が得られるものが必要であると考えられる。また、何か音を聴くという行為ができるようになれば、他の音も聴くことができ、より広範囲に耳を開くことができるため、仕掛け自体には大きな意義があると考えられる。

5. 提案1 「今を聴く『サウンドスケープワークショップ』」

5.1 音を聴かなくなった現代人

現代人の耳をコンサートホールの外へ、現実の自然や都市の環境へと切り開いていかなければならない。ノイズとなってしまった音を聴くためには意識してその音を聴く必要がある。意識して聴くために

は「イヤークリーニング」によって聴き方を育む^り。

5.2 音を聴く

注意して聴かなくても音が聴こえる環境づくりというのは必要である。しかし、マリー・シェーファーが言う^りように「イヤークリーニング」をしなければ、ただ音が聴こえるようになったということで終わってしまう。音を聴くという行為は街を知ることにもつながる。

5.3 サウンドスケープワークショップの提案

本研究は、「イヤークリーニング」としてサウンドスケープワークショップ(音さがし)を提案する。

5.3.1 実施場所

本校の敷地(現在)

5.3.2 実施場所選定理由

学校の授業でサウンドスケープリサーチを実施する中で、本校の敷地を含む周辺からは想像ができないほど多くの音が聴こえた(表1)。本校内には木が多くあり、多くの生き物が訪れている。音には記憶の音という役割もあるため、本校の記憶をこの敷地空間に残し続けるためにも音というものをここで聴いてみる。

表1 音の豊かさを示す音の種類

自然音	鳥の鳴き声、虫の鳴き声、虫の羽ばたき、葉っぱのこすれる・揺れる音、風の音など
交通音	自転車の音、バスの音、自動車の音、飛行機・ヘリコプターの音、電車・新幹線の音など
機械音	建設現場の音、モータ音など
人間の音	キャリーケースの音、話し声、台車の音、ボールをける音など
学校の音	台車の音、写真を撮る音、チャイムの音、自動ドアの音、水が流れる音、実習中の音など
指示装置の音	ウインカーの音など

5.3.3 対象

日本国内居住者、訪日外国人客(以下、全世代)

5.3.4 サウンドスケープワークショップ実施方法

今回のサウンドスケープワークショップは与えられた質問に答えるという形で進めていく。この方法を選んだ理由は、授業で行っている10分間のトレース調査の方法をとると、時間がかかってしまうからである。また、初めて音を聴く人はたくさんの音を認識することが難しく、集中力も必要なため、ワークショップとして不向きであると考えたからである。全世代を対象とするため、気軽に参加でき、音を聴くという楽しさを知ってもらうことを目的とするため、この形式で進める。また、質問形式をとることによって聴いてほしいポイントを提示できることも理由の一つにある。

5.3.5 サウンドスケープワークショップの質問作成

サウンドスケープワークショップの質問づくりの前段階として、本校のサウンドスケープを調査する。

(i) 事前調査

本校の敷地を対象にサウンドスケープリサーチを行った。

〈リサーチの方法〉

- ・本校の敷地をA～I地点にわけ。
- ・10分間、決められた場所に立ち、聴こえてくる音をトレース調査用シート(図9)に記録する。
- ・音を「自然音」「交通音」「機械音」「人間の音」「学校の音」「指示装置の音」に分類する。
- ・pp～ffまで音の強度を分類する。

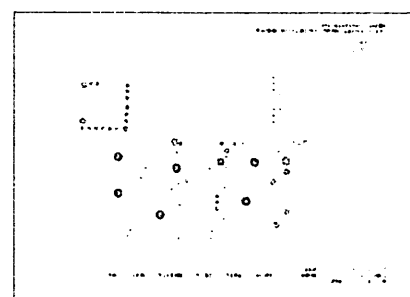


図9 トレース調査用シート

〈追加リサーチ〉

- ・調査ポイントをもう一度回ってどんな音が聴こえてくるか耳を澄ませしてみる。
- ・校内全体を回ってみて、音がどのように変化していくかを調べる。
- ・なぜその音が聴こえるのかを周囲の状況を観察してみる。

〈リサーチを通して気づいたこと〉

- ・場所によって聴こえてくる音、聴こえない音は異なる。
- ・同じ音でも場所によって聴こえ方は異なる。
- ・自然の音がよく聴こえる場所もあるが、全く聴こえない場所もある。
- ・どの場所でも自然の音よりかは交通音、機械音が目立つ。
- ・交通音、機械音は一定で単調。変化があまりない。

(ii) ワークシートの作成

調査をもとに実際に質問を作成する。それをもとにサウンドスケープワークショップで用いるワークシートを作成する(図10)。

〈作成した質問について〉

作成した質問は、次のようにレベル別に分けた。

・レベル 1…少し耳を澄ませればすぐにわかること。あまり意識しなくても耳に入ってくる音に関して問うもの。

・レベル 2…目を閉じて聴いてみたり、どこかを歩いてみたりするなど普段はすることのない音の聴き方をして、それについて問うもの。

・レベル 3…全神経を集中させ、聴かなくてはいけないもの。ただ聴くだけでなく、考えながら聴くもの。

5.4 サウンドスケープワークショップによる効果

このワークショップを行うことによって「音を聴く」という行為のきっかけになる。耳の教育¹⁾にあるように、「音を聴く」という行為をすることによって新たな発見、気づきを得ることができる。今までの生活にはなかった経験をするにより、ワークショップに参加した人自身の生活に刺激を与えることができ、これをきっかけとして街の歩き方を変えることができる。

【耳の教育とは¹⁾】

「正しい手本を指示して教える」といった従来の教育イメージとはかなり異なるものである。「異なる聴き方への気づき」「多様な聴き方の発見」といった「他者の理解」を大切にするものをさす。

6. 提案2 「未来に残し、過去を聴く『町の中に音を聴く仕掛けを取り入れる』」

6.1 音を聴く仕掛けをつくる

「5」で述べたように音を聴くということは大切なことであるが、毎日サウンドスケープリサーチを

音さがし



①一番大きく聴こえる音は何か。

②どんな交通の音が聴こえるか。
(一番大きく聴こえた音に○をつける。)

③木や草などの自然の音はどんな音か。(細かい、荒い、大きい、小さい等)

④どんな生き物の声がするか。

⑤目を閉じて、通行人から発せられる音を聴き、どんな音かを考えてから目を開けて確認してみる。
どんな音か(考え) _____
実際 _____

⑥目を閉じてB-B'地点まで歩いてみる。
交通音はどう変わったか。
大きくなった音 _____
小さくなった音 _____
遠ざかっていた音 _____
その他気づいたこと _____

⑦B地点に立って目を閉じてみる。自然の音と交通の音の違いを感じてみる。
気づいたこと _____

黒:レベル1、赤:レベル2、青:レベル3

図10 作成したワークシート

行うことはできない。リサーチができなくても、音に触れたり、音を聴くという行為を通して、街を知ったりできるようにすることが必要である。そこで、音を聴く仕掛けを取り入れた「東屋」を提案する。

6.1.2 音を聴く仕掛けづくりの実施場所とその理由

実施場所…本校の敷地(再開発後)

選定理由は、「5」でも述べたようにこの校舎にはいろいろな音が溢れていることを活用し、本校が移転した後、再開発された後に再開発された敷地空間に本校の記憶を音によって残すことができると思ったから。

6.1.3 基本コンセプト

注意して聴かなくても音が聴こえるようにし、イヤークリーニングのシステムを街の中に取り入れ、本校に今ある音を生かしたつくり、本校の特徴を生かした空間づくりを行う。

日本では古来より「サウンドスケープ=音の風景」の概念に通ずる感性があった。「虫聴きの会」など「音の風景を楽しむための名所」があった¹⁾。これらのことから都市に潜む人々にとって煩わしい音を日本古来の音と融合させることによって心地よい音に変える。また、日本古来の音との聴き方と今ある自然の音を組み合わせる心地よい音を生み出す。

また、5.7より、日常に刺激を与えるものにする。自ら音を発することによって、その人自身が解放される空間をつくる。これらを基本コンセプトとする。

6.1.4 今ある音を残す(本校の残したい音)、今ある音を聴く、自分で音を発する

(i) 風の音や虫の鳴き声などの自然の音

風鈴を用いることにより、風の音を視覚的に聴けるようにする。一つだけでなく、いくつも置くことにより非日常感を演出する。また、季節を感じることができるよう夏以外は置かない。風鈴だけでなく、竹をつるし伝統的な素材と融合させて音を聴く。虫の鳴き声は、交通音の吸音によって聴く。

(ii) 雨の音

雨が落ちる先にししおどし、水琴窟を設置する。また、雨水を屋根から流す。

(iii) 校舎の老朽化による雨漏りの音

あえて雨漏りをさせる。雨漏りの先に水琴窟、ししおどしを設置。雨の日にしか感じられないことをつくりだす。

(iv) 校舎の老朽化による軋みの音

足音を楽しむ場所にあえてきしんだ床をつくる。

(v) いろいろな人の足音

島根県芸術文化センター グラントワのスタッフの方が靴によっていろいろな音がして楽しいと語っていたため²⁾、足音が心地よければ歩くことが楽しくなると考える。そこでいろいろな足音を聴くことができるよう床を工夫する。今回提案する「東屋」では、コンクリート(図 11, 右)、砂利(図 11, 上・左)、タイル(図 11, 中心部分)、木の板(図 11, 下)を用いた。

(vi) 椅子

椅子を空洞にすることにより、叩いたときの音を感じることができるようにする。

6.1.5 煩わしい音を心地よい音にする

都市の人によって、単調で煩わしいとされる交通の音を吸音し、それ以外の音を聴けるようにする。
(吸音の方法)

台東区立旧東京音楽学校奏楽堂の吸音方法を参考に昔ながらのやり方で吸音を行う³⁾。音楽ホールの壁には、外からの音を遮るために藁が詰められているという。よって、今回提案する「東屋」では、壁に藁を詰め込んで吸音を行うことにした。

6.1.6 音を愉しむ

沖縄の伝統的な強い日差しをやわらげ、風を通す花ブロックを日本の素材を感じることができるよう用いた。また、視線が外に向くように、椅子を配置した。中に座っている人が水琴窟やししおどし、風鈴、竹を見て音を視覚的に感じられるようにするだけでなく、東屋の周りを通る人も中の人の様子が

わかるように壁をなるべく少なくし、柱を中心とした構成にした。屋根は、水琴窟やししおどしがある部分を開放することによって、雨を流すことができるようにした。

〈作成した図面(図 11～図 19)〉

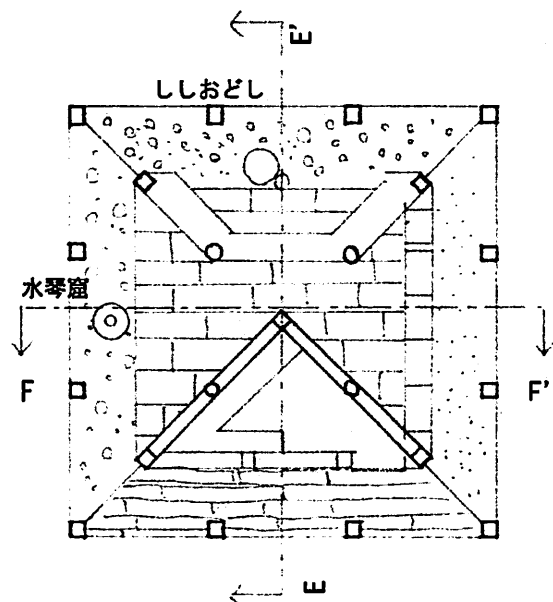


図 11 平面図

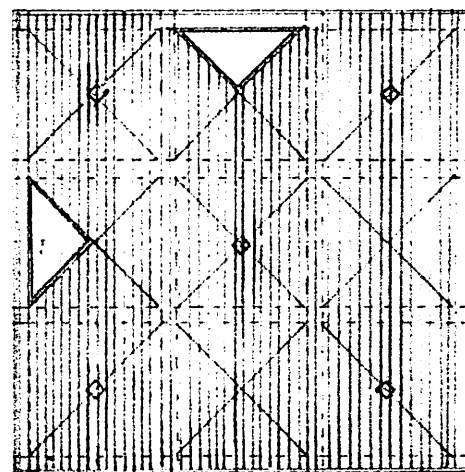


図 12 屋根伏図

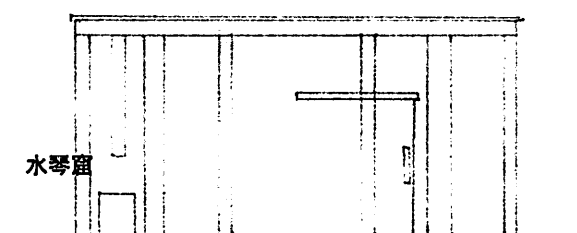


図 13 A展開

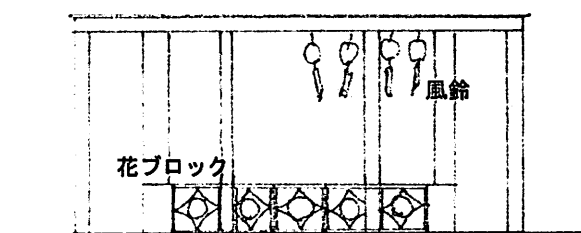


図 16 D展開



図 14 B展開

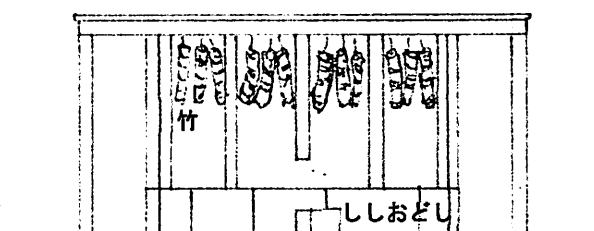


図 15 C展開

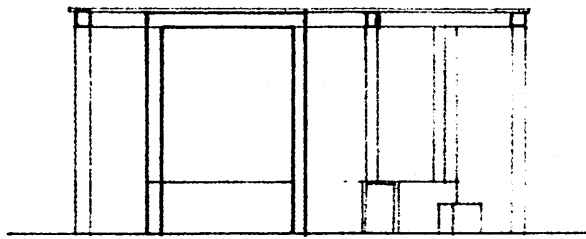


図 17 E-E' 断面図

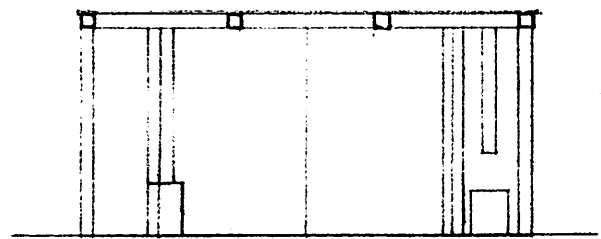


図 18 F-F' 断面図

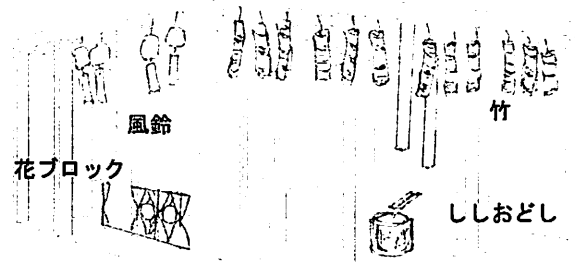


図 19 透視図

6.1.7 東屋設置に関する効果

東屋を設置することによって、休憩をしながら、気軽に音に触れ、音を聴くという行為をすることができる。ここで感じた小さな変化によって耳が広く開かれていき、音というものの見方を変えることができるようになる。

7. まとめ

本研究では、文献調査やサウンドスケープリサーチの調査によって、日本には古くから「音を聴く」という文化があるのにも関わらず、都市の人がなぜ音が聴こえなくなっているのかを明らかにした。その結果、コンサートホールの発明や都市の音の特性から、音というものを注意して聴かなくなってしまったからだとわかった。本提案のように「サウンドスケープワークショップ」の実践や「東屋」の設置によって、「注意して聴く」、「注意して聴かなくても聴こえる」、「街に耳を開く」ということが可能となると考えた。そして、日本に古くからある音や音の聴き方を取り入れることで、心地よさや自然本来の姿を感じることができるようになるだろう。さらに、「サウンドスケープワークショップ」の実践を「現在」、「東屋」の設置を「過去、未来」とし、時間軸と音を組み合わせて考えた。時間軸と組み合わせたことで、聴こえる音からその時間における空間の様子、環境を明らかにすることができる。

8. 参考文献

- 1) 鳥越けい子:サウンドスケープ[その思想と実践], 鹿島出版会(1997)
- 2) keikotorigoe.com, 鳥越けい子の思索と活動 (<http://www.keikotorigoe.com/>) [参照 2025/10/15]
- 3) 藝大アートプラザ, 台東区立旧東京音楽学校奏楽堂
(<https://artplaza.geidai.ac.jp/sights/11922/>) [参照 2025/10/15]
- 4) 中川政七商店の読み物, 「花ブロック」は何が優れているのか? 専門家に聞く特徴と歴史
(<https://story.nakagawa-masashichi.jp/63177>) [参照 2025/10/15]
- 5) 島根県芸術文化センター「グラントワ」, 島根県芸術文化センター「グラントワ」
(<https://www.grandtoit.jp/>) [参照 2025/10/15]